

## うわさの「西部の三悪人」 拝読

WEBを遡って拝見する内、面白い遣り取りに惹き付けられた。

西部の三悪人と愛称されたSHYさんの西部劇トーク三昧は、既に語り草になっているに違いない。

拝読して、先ず御三方が蓄積した情報量の多さと情熱にタジタジとなる。おそらく読者諸氏も、圧倒されたに違いない。

趣味をほとんど手付かずで過ぎてきた僕のレベルからすれば、学業やお仕事はどうされていたんだろう？ などと思ってしまう。いや失敬、こうした常軌を逸した取り組みようなら、きっと何事も大したものだったろう。

また、御三方の活写する表現がすばらしく、そのシーンがまさに眼に浮かぶ。そして同時に御三方三様の特長を感じたので、叱られるのを先刻承知で、ひとこと感想を延べてしまいたい。

(SHYさんの順番で感想させていただきたく)

先ずS氏

牛の烙印の登場、その経過や後年のバックルにつながる挿入話など小道具の扱い、牛やカウボーイたちの本能的な動き、その背景の絵画的な表現には、さすが感性の豊かさを感じる。

また、登場人物の心情も細やかに優しく見て怠らない鑑賞眼。

さらに、劇中人物の立ち居・ふるまいなど西部劇お決まりのようなシーンや筋書きに、日本の時代劇を重ねて観たりしている。

まさに演出家、のような眼だ。

H氏

名古屋に赴任するまでの間、しょっちゅうお互いの家を行き来していたにも拘わらず映画に人生を重ねるような傾倒ぶりはつゆ知らず、あらためて、頂戴した2冊の著作に目を通して、驚いた。

まるで西部開拓史をひも解くような見解で、とめどなく語ってゆく、その詳しさに敬服である。

西部劇に限らず、かなり広範囲なジャンルの映画の魅力に触れているが、西部劇に惹かれるのは、終戦直後の貧しく不自由な時代に、対照的なアメリカの文明文化に接した衝撃として、今もなお幼な心の消

し難い残影として懐かしむところがあるという。

確か、S氏も同じような感想を述べているが、それは同じ世代の僕らにも、解かる気がする。

Y氏

生き字引といったらよいのか、検索エンジンを搭載した如き、役者や監督や時代背景、主題歌、その他関連エピソードの繰り出しには驚くばかりだ。当初やや叙事的な文章を読み進める内、人物が登場するや、特に女優に至って、突然のごとく情けの濃い表現となって、このあたりがY氏の真骨頂なのではないかと思った。

この詳しさ、映画の道に通じた仕事を手掛けていたのかも知れぬ。

僕は思った。

映画を観るといふより映画の中に生きていくような御三方で、趣味というレベルでなく、映画は生涯追及のテーマなのかも知れない。

ちよっと脇道に逸れるが、以下はS氏から聞いた話で、

阪神タイガースの熱烈ファンはつとに有名だが、S氏の知り合いは何と熱烈ファンのファンなのだ、という。ファンの熱狂振りが面白くその姿が魅力なんだという。

同様に、「西部の三悪人」の熱気は、外野（読む側）を引き込むような魅力があつて、阪神のそれに通ずる雰囲気を感じ出していると云つていい。もう一度、別の角度からでも彼らを楽しんでみたいものだ。

ついでながら、僕もささやかながら自慢したいことがある。

大学時代、京都の名園「桂離宮」を仲間と訪れていた時のこと。

「眩しいのか、目元を細めて遠くを見る表情、他を寄せ付けない厳しさがこもる」スクリーンでお馴染みのスターと、肩が触れ合う近さですれ違ったのだ。

間違いない、すれ違ったのは、まさに生身のクリント・イーストウッドさん（ローハイドの御一行）のはず。

慌てて、後を追って、にわかサイン会が始まった。

その時の表情は、目元の涼やかな格好の良い先輩紳士で、眩しかった思い出となった。